
カオス・クロニクル

岡村 としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオス・クロニクル

【Nコード】

N3140Z

【作者名】

岡村 としあき

【あらすじ】

MMOの黎明期はとうに過ぎ、数々のタイトルがサービスを終了してきた。サーバー統合。つぎはぎだらけのアップデート。放置されたバグ。このカオス・クロニクルもまた、混乱の時代にあった。サービス終了目前と囁かれるMMOで、一人のベテランプレイヤーと一人の初心者プレイヤーが会う。

押し切れなかったEnter

一瞬の迷いが命取りになる。たった一度のミスが原因で全てが台無しだ。そうならないように、ただただ最善を尽くす。

秀麗な鎧を着込んだ金髪の若い男や、下着同然の派手なローブを着込んだ銀髪の若い女、2メートル近い体軀をした緑色の肌の大男。彼らの命を守ることが、ここでのオレの役目。

目の前で火花が散る。薄暗い洞窟の中で、戦いが始まった。ロックアントと呼ばれるモンスターの討伐……それが今回の仕事だ。

近隣の村人を襲う悩みのタネで、これを数体討伐すれば、村長からたんまりお礼がもらえるというわけだ。

アントの巣と呼ばれる洞窟は、入り口が一人一人入るのがやっとだった。中に入ると中は迷路のように入り組んでいて、一度はぐれると死体で再会……なんてことになりかねない。

今回組んだのはオレを含め4人だ。鎧の若い男が、シュレン。エロいねーちゃんがマリアベル。大男がパツクン。そしてオレ……エルト。

入り組んだ迷路を進むこと数分。大きな空間に出た。その直後だ。所々の穴という穴からアント……バケモノアリが湧いてくる。

シュレンが切り込む。盾を持つ左半身を前に出し、右手の剣で襲い掛かってきたアリの前足を切り落とし、そこに畳み掛けてきた別のアリの攻撃を左の盾でガードする。

しかし、次の瞬間そのアリは自分の頭を失っていた。パツクンが左右の手に握った鉄のハンマーで背後から飛び掛り、頭を叩き潰したのだ。返り血にも似た粘液を顔に受け、パツクンは笑う。シユレんのほうも、鎧を緑色の何かで汚していた。

横穴から湧いて出たアリに、マリABELが火属性の中級魔法『ブレイズアロー』の詠唱を始める。マリABELの足元に六芒星の魔法陣が発現し、彼女の掌からバスケットボールほどの大きさの火炎球が3つ放たれ、アリを焼き尽くす。

耳障りな『ギギギ』という音を立ててアリは灰となって大地に還る。

今日初めて組んだ彼らだが、チームワークは即席にしても、うまくまとまっていた。

「3匹来た！ スリを頼む」

「わかった」

オレの出番らしい。オレには彼らの様に、強固な盾も無ければ、一撃必殺の技もないし、圧倒的な火力を持っているわけでもない。やれることはただ一つだ。

彼らのサポート。

対象の意識を数秒間奪うことのできる催眠魔法『スリープ』の魔法を使う。オレの足元にもマリABELと同様の六芒星の魔法陣が発現する。

白い霧がアリ共を包み込み、意識を奪うことに成功。その間にシユレンの体力を回復するべく治癒魔法『ヒールライト』を唱える。

シユレンの体は白い光の柱に包まれ、傷付き、血がにじんでいた皮膚が即座に修復された。

「よし、あと一息で目標数達成だ」

このチームのリーダーである、シユレンの掛け声で士気があがった。パツクンもマリアベルも、やる気をたぎらせている。オレはそれを後ろから冷静な目で観察していた。

ヒーラーであるオレまで熱くなるわけにはいかない。状況の変化を見極め、敵との適切な距離を保ちつつ、味方に絶妙なタイミングでアシストを入れる。生命線であるオレが無闇に前に出るわけにはいかない。

それがヒーラーだ。

シユレン達の活躍もあり、程なくして予定数の討伐が終わった。

討伐が終わったオレ達は、村に帰還すべくオレを中心に集まった。帰還魔法『リターン』を発動させる。発動と同時に、一瞬視界が暗転し、景色がのどかな山村の風景へと様変わりした。

「おつかれ、またよろし〜^^」

「おつですー」

「おちゆ^^」

オレ以外のメンバーはそういい残し、パーティーを解散すると、村長の家へと報酬……クエストアイテムとお金を受け取りに行った。

『またよろしく』。ディスプレイにそう表示された文字。あとはエンターキーを押すだけ。たったそれだけの事を、一瞬躊躇^{ためら}った。

夕闇が空を支配しつつある午後5時。窓辺にまで闇の魔の手が伸び、室内は真っ黒だ。

学習机の上に設置したノートパソコンのディスプレイ……。そこには、青い髪の少年が映し出されている。

先ほどまで、動かしていたキャラクター……エルト。

エルトはまるで、プレイヤーと同じ様に面白くなさそうな顔をして、鋭い視線で空を見つめていた。そういう顔に設定したのは自分だが。

しばらくエルトと同じ様に天井を見上げる。そして、キーボードを6回叩いた。

メッセージウィンドウには何も表示されていない。Backspaceで消したからだ。

もう誰とも関わりたくない。彼らともこれっきりだ。ソロのほうがいいし、時間に縛られずに済む。

足を引っ張るのも嫌だし、引っ張られるのはもっと嫌だ。

一匹狼でいい。

再び視線を天井に向け、イスの背もたれに全体重を預けると、大きく伸びをする。

席を立ち、パソコンの電源を入れっぱなしにしたまま、自室から出ると下の階へと降りていった。

まるで……ゲームからも逃げているみたいでなんだか嫌な気分になった。

出会いとターニングポイントなネタ師の初心者

カオスクロニクル。純国産MMOである。サービス開始から8年……日本のMMOの黎明期を生き続けたゲームだ。

美麗なグラフィックと6つの種族と8つの職業。プレイヤー同士が戦うPVPシステム。

当時のMMO業界に新風を巻き起こし、最盛期はサーバーが混雑しすぎて臨時サーバーメンテナンスが週に2、3度あった。

それから7年経った今は……サーバーも統合され最盛期の見られる影もない。それまで月額制だった課金システムも、基本無料になり、プレイヤーの数は一時的に増えた。

育成も大幅に楽になり、新規プレイヤーが増加したのだが、それも一時のこと。無料になった事で、低年齢層のプレイヤーも増加した。

彼らの中にはモラルに欠ける者も少なくなかった。それが古参プレイヤーとの軋轢を生むのにそう時間はかからなかった。

現金でゲーム内通貨を購入するリアルマネートレード……RMTや、ゲーム内のキャラをプレイヤーの代わりに育成する、育成代行が蔓延はびこり、それに手を染める新規プレイヤーも後を絶たない。

そんな新規プレイヤー達がいわゆる『害プレイヤー』になって、面白半分にPVPを初心者や低レベルプレイヤーにしかけ、低レベル帯の狩り場は一時、害と古参プレイヤーの死体が転がる戦場とな

った。

それから1年。害プレイヤーの多くは飽きてしまったのか、姿を見せる事はなくなり狩り場は以前の姿を取り戻した。

MOBだけのフィールド。静か過ぎるダンジョン。入場制限無しにいつでも入れるインスタントダンジョン。

それが、元の平和なカオス・クロニクルの姿だ。

ゲームに戻ってきたオレは、空を見上げながらふと思い出していた。CGで描かれた青空には雲の塊がゆっくりと現実世界さながらのように流れている。

時刻は午後9時。外は真っ暗だが、カオス・クロニクルの世界では昼間だ。日曜の夜。普通ならば、回線が込み合ってラグが多くなる時間帯なのだが、依然快適である。

パーティーマッチの画面を開く。まばらだが、いくつかパーティーメンバーを募集しているパーティーがあるらしい。ご苦労なことだ。

とりわけ、ヒーラーが不足しているのか、ヒラ様募集中のコメントがよく目に付く。すると、案の定だ。

「”どもっすー。今ヒマしてません？ よかったら悪魔の森にでも行きませんか??”」

「”どうも。他のパーティーに誘われちゃったんでまた今度お願いします”」

「りよーかーい^^」

「ご苦労な連中からたくさんのお金……プレイヤー間同士で会話するウィスパーマードでラブコールが飛んでくる。そのすべてを同じ理由で断って、うんざりしながらパーティーマッチ画面を閉じた。

興味本位で開くべきじゃなかったな。

インベントリを開いて、所持品の確認をする。すると、MPポーションが切れていたので買出しに行くことにした。念の為、自分の倉庫を覗いてみたがストックがなかった。

シユレン達とクエを受けた村『オルティアの村』を出て、街道を一人行く。川沿いの道を歩いて、草原を走る。ここまでの道のりで、他のプレイヤーとすれ違う事はなかった。

当然か。いまさらこんな死に掛けのゲーム……新規で一から始める物好きはまずいない。このあたりは低レベル帯ゾーンだから、プレイヤーよりもNPCの数が多いんだろう。

……快適だな。そう考えていると小高い丘の上に出て、目的地が見えてきた。

『ハリの村』……通称、初心者村だ。カオス・クロニクルを始めたプレイヤーはこの村からスタートする。

基本的なチュートリアルを兼ねたクエストを受け、レベル15程度で外の世界によく繰り出せるわけだ。

ハリの村は、基本的にすべての物品が低価格だ。初心者が買いやすいように値段が設定されていて、他の村に比べ2割ほど安い。

オレは、消耗品は週に一度ここに買いに来て、倉庫にぶち込んでおくようにしている。他にも何か切らしている物はあったかな？とそう考えていたときだ。

珍しい。村の前で、ラグが起こった。

ラグの原因は目の前……それを見てオレは声をあげそうになった。恐ろしい数のMOBが渦巻いていた。50くらいだろうか？それらが村から少し離れた平原でぐるぐると竜巻のようにうねっている。

大量に集めて範囲スキルをぶち込むまとめ狩りだろうか？それとも、初心者を対象にしたMPK？

どちらにせよ、関わるつもりは無い。無視して村の入り口に立った時。MOBの渦が突然散らばりだした。どうやら、渦中のプレイヤーは戦闘不能になったらしい。

いったいどこのアホだと思って、そこに近づいた。

珍しい。素直にそう思う。そして、納得した。

カオス・クロニクルには、6つの種族が存在する。ヒューマン。エルフ。ダークエルフ。ドワーフ。オーク。フェイブ。

ヒューマンや、エルフなどは他のMMOでも良く見かける種族だ

が、カオス・クロニクルにはオリジナルの種族が一つある。

それが、フェイブ。

フェイブは、古代人が神と戦う為に作り出した^{ホムンクルス}人造人間だ。ヒューマンの遺伝子を元に、エルフのビジュアル。ダークエルフの魔力。オークの力。ドワーフの器用さ。

それらを兼ね備えた戦う道具として、愚かな古代人が神様ごっこ
の果てに生み出した最終兵器の一つである。

白く美しい肌に、流れるような銀髪。宝石よりも美しく輝き、闇
の中で不気味に光る赤い瞳。

ヒューマンの手足として、死すらも恐れない殺戮人形。ここまで
語ればこの種族は最強なんじゃないか、とか考えてしまいが唯一に
して最大の弱点がある。

寿命だ。所詮は古代人の神様ごっこ。凄まじいまでの戦闘力を持
ち、死すらもおそれない彼らだが、その寿命はたったの20年。

というのが歴史的な設定で、ゲーム的な設定はというと防御が紙
なのだ。

高い攻撃力、高い魔力、底を見せないMP。そして、あってもな
くても同じ0に等しい防御力と、一撃食らえば即死レベルのHP。

6回目くらいのアップデートで追加された種族で、追加当時はチ
ート性能で右を見ても左を見てもフェイブ、フェイブ、フェイブ。

そして次のアップでネタに早変わり。今も、野良のパーティーでフェイブを使って紛れ込むと、即追い出される。

ネタ師か、初心者か、よっぱどの熟練者でなければ使いこなすのは難しい。そう。

オレの目の前で倒れているのは、フェイブの少女だった。

「おい、大丈夫か？」

蘇生魔法くらいはかけてやろう。久しくお目にかかっていないフェイブだ。

案外、大量にMOBを引いたのも何かのネタだったのかもしれない。いな。

しかし、30秒立っても、1分立っても返事は無い。離席しているのかもしれない。そう思って、その場を離れかけたときだ。

「おんがいsmすっすしゅ」

「はあ？」

意味の分からない、初めて耳にする……いいや、初めて目にした言語だった。SMとか言ってるからやっぱネタ師か、こいつ。

「おねがいします」

どうやら、単なる打ち間違えだったらしい。

スキルアイコンから、蘇生魔法『リザレクション』を選び、フェイブの少女を蘇生する。

光の羽が上空から舞い降りて、少女は起き上がった。

それが、オレとこいつの出会いで、ターニングポイントだった。

フェイブナイト

「助かりましたあ^^w」

フェイブの少女は立ち上がるやいなや、ソーシャル『喜ぶ』を使って、子供のようにきゃっきゃっ飛び回った。

キャラクターの真上に表示されている名前を見る。…… punpun321という名前だ。なんだこりゃ？ プンブンさんにーいち？ マジでキレル3秒前とかいう意味か？

「punpun321です^^v プンって読んでくださいね」

プンはそういうと一人で拍手したり、一人で泣いたり、一人で笑い始めた。もちろん、これもソーシャルによるものだが。『褒める』、『悲哀』、『笑い』を使ったんだろう。

「いや、驚いたよ。まさかフェイブのネタ師がまだ全滅してなかったなんて」

「プンはネタ師じゃありませんよぉ；；； 頑張つてレベルを上げていたのです！ そしたら、まわりのモンスターさんがいっぱい寄ってきてちゃって……」

どうやら、無闇にMOBの群れに突っ込んだ挙句、大量にリンクさせてしまったらしい。初心者によくありがちなミスだ。

「でも、助かりましたあ！ 蘇生ありがとです^^」

プンは再び、ソーシャル『踊る』で一回転してみせる。プンのシルバーの長い髪とワンピースの裾が優雅になびいて、銀色の妖精が草原に舞い降りたかのように錯覚する。

女フェイブはビジュアル面だけでいえば、女性キャラの中でもっとも人気が高い。

特に、カオス・クロニクルの女性キャラクターの装備は、露出が多く、ローブ系の装備などは下がミニスカートになっていて、スキルを使う瞬間カメラの角度を変えれば……見える。

女フェイブはエルフ並みの美しさを持ちながら、出ているところはけっこう出ているのだ。

プンが装備しているのは、クエストでもらえる報酬アイテムの、グレードがかなり低いローブなのだが、白いワンピースのようになっていて、丈が膝上20CMくらいしかない。

それを纏ったプンが、さっきからやたらとオレの目の前で乱舞している。その度、危うい角度で聖域がこの不浄なる世界にさらされているのだが……後で注意してやるか。

とりあえず、このまま去ってしまったてもよかったのだが、いくつか忠告でもしといてやる事にする。また村の前でラグ起こっても嫌だし、何度も『蘇生してください』なんて、ウイスが来たら鬱陶しい。

「オレはエルト。レベル44のビショップ……ヒーラーだ」

「ブンはレベル12のフェイブナイトです！ よろしくね、エルくん^^」

ナイト……フェイブナイト……レアだ。とりわけ紙装甲のフェイブに一番ミスマッチな職業の組み合わせ。

敵の攻撃を一手に引き受けるナイトは、パーティー狩りではとても重要な職だ。ヘイトスキルを使って、敵のターゲットを自身に集中させれば、ヒーラーにとってもHP管理がしやすい。

高い防御力と、敵のターゲットを自身に向けさせるスキル。パーティーでは文字通り盾であり、壁なのだ。

それ故、どのパーティーも必死にナイトを勧誘しようとするのだが、いかにせん数が少ない。敵のターゲットを集めるという事は、それだけ死亡率が高いということでもあるからだ。

カオス・クロニクルでは死亡すると経験値が減少する。それも、20分くらい狩りをしてようやく取り戻せるくらいの量だ。パーティープレイには困らないが、それ以上にリスクが大きいので敬遠されがちな職業である。

それに……フェイブナイトは不遇職かつ、不人気職のナンバーワンで、ナイト募集のパーティーでも、『それならローブを来たヒーラーのほうがマシ』だなんて、冷たく言われてしまう。

レベルが60になれば神スキルと呼ばれる『ヴァンガード』が使えるのだが……そこまでマゾな奴はそうそういない。

こいつは、何でこんなマゾいを選んだだろう……ふとブンを見

ると、いつの間にかMOBの群れに突っ込んで、仲良く鬼ごっこに励んでいた。

しかも、さつきよりも数が多い。……あいつ、絶対何も考えずに外見と名前だけで選んだな。

「いや〜〜〜〜〜〜〜>< 助けて、エルくん……」

チャットとキャラの操作が同時に出来ないらしい。急に立ち止まったプンはボコスカMOBに殴られて、悲鳴を上げて倒れた。その10秒後にさつきのセリフが流れたわけだが……。

それにしても……誰もこいつと組もうとは思わないだろうな。初心者で、不遇職で、プレイヤースキルもないし、何も考えてない、チャットも遅い。……オレもこれ以上関わるのはよそう。

初心者に関わるとロクな事がないのは、オレ自身がよく知っているはずだ。それは一年前、嫌と言うほど思い知っただろう？

クソ……思い出すだけで……腹が立つ。

「プン。お前、ギルドは？」

リザレクションをかけ、再び蘇ったプンにそう問いかける。

プンはまた一回転して、ワンピースの裾を危うく舞わせると、おもむろに派手な紋章の入ったマントを装備して、こちらに振り向いた。

「入ってるよー^^ これがプンの所属しているギルド『灰色の狼』」

のギルドマントなのだ。>< どうだ、マイツタか@@w」

背中をこちらに向けて、プンはそう言った。

その小さな背中にくっ付いているマントの紋章を見て……マウスを握る人差し指が……一瞬停止する。

ギルドに加入したプレイヤーには、無償でギルドエンブレムが入ったマントが支給される。

プンの背中には猛々しい狼の顔がドット絵で描かれていた。

「お前……『灰色の狼』のメンバーなのか」

灰色の狼はオレがプレイするサーバーで最大手のギルドだ。ギルドメンバーは常に100人以上いて、エリアボス討伐を独占していたり、各職業ナンバーワンを決める『トーナメント』にその名を多く刻んでいる。

ギルメンは廃人ニート共がほとんど。さっき組んだパツクンも『灰色の狼』のギルメンだった。

「プン、それならギルメンに声掛けて育成手伝ってもらえよ。こんな所でソロなんかしてないでさ。手伝ってもらったほうがすぐに転職もできるぞ?」

後はギルメンさんに任せよう。元々、こいつに興味があったわけでもないし、そもそもオレは、初心者支援の優しいベテランプレイヤーなんかじゃない。

だが、プンはすぐに返事を返さない。

「……」

わざわざ沈黙をチャットにして表して、先をもったいぶってみせる。何が言いたいんだ、お前は？

キーボードの上に載せたFキーとJキーの上で、軽く指を動かし、苛立ちながら辛抱強く待つ。

「……」

数秒間を置いて、プンが喋りだした。

「皆、忙しいから無理って言われた><; ギルメンなのに助けてくれないよーどうしよう、エルくん……」

どうやら、ギルメンにも煙たがられているらしい。大手のギルドなんて、そんなものだ。勧誘するだけしといて、あとは放置。

あとは各自、自由にギルメンと仲良くやっってくださいねー。とか言っただけとかれる。周りにすぐに溶け込めるようならいいが、そうでなければ孤立してギルドに居場所は無い。

孤独なのだ……プンは。

狩り場に行っても誰もいないから、同じレベル帯の友人もできないし、ギルドでは初心者扱いされて、半分バカにされているんだろ。

かわいいそうと言えはかわいいそうだが……。ボランティアで友達ごっこなんてオレはごめんだ。

「ねえ、エルくん？」

プンがオレに疑問形で何かを問いかける。解っている。その先の言葉は。オレに超能力はないが、その先の言葉は解る。

だから。

その言葉が出る前に。

プンよりも早くキーボードを叩いて。

その言葉を紡ぎ出す。

「一人でも大丈夫な狩り場、教えて！ プンがんばって狩りうまくなるから^^」

オレの言葉よりも早く、プンがオレの予想を裏切る言葉を紡いだ。

それでも、オレの心は変わらない。

すでにメッセージウィンドウには文字の羅列がセリフとなって、Enterを押されるのを今か今かと待っている。

キーボードを操作して、オレはオレの意思をプンに伝える。

『彼女に送るプレゼント』

「ありがとうございますあ」

能天気そうなセリフを背中に受けて、村の道具屋から一步外にでる。

道具屋の看板娘ホリーちゃんは、村一番の美人らしい。そう何度も村の警備員マーシーが独り言を繰り返しているので、これはプレイヤーの間でも有名な話だ。

クエスト『彼女に送るプレゼント』は、14レベルで一回だけこのストーリーカー警備員から受けれるが、その報酬が経験値と装備のセツトなのでこれをやらない手はない。

内容も、一匹だけクエストモンスターを狩るだけでお手軽だ。

道具屋を一人出たオレは、倉庫に向かった。倉庫番のドワーフに話しかけ、消耗品をたくさんブチ込んでおく。

隙間なく押し詰められたポーション類に、癒される。やっぱり、物がぐちゃぐちゃしている方がなんだか落ち着く。ちなみにオレは掃除が苦手だ。

今も部屋の床には色々物がちらばっている。両親がそれを見るたび溜め息をついて『片付ける』とうるさい。余計なお世話だ。

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は別にある。

倉庫を後にして、村の塀にそって外に向かう。見えて来た。

ストーカー警備員マーシーが今もうつむいて、『ああ、ホリーちゃん……』とか、『今どうしてるんだろう、ホリーちゃん……』と、ホリーちゃんへの思いを募らせている。

そのマーシーの前に、軽量の鎧に身を包み、剣と盾を持った銀髪の小柄なフェイブの少女がいた。

「クエ、ちゃんと終わったか？」

「うん、エルくんのおかげだよ！ ありがとう！>|<」

ブンがオレに近寄ってきて、飛び跳ねる。子犬のような奴だ。

「レベルも15になったから、違う村に行けるね、やったー^^v」

「そうか、15になったか。じゃあ、『ミロンの村』に行こう。うまいクエをいくつか知ってる」

「ほんと@@ お世話になります、師匠m) (mペコリ」

ようやくナイトらしくなったブン（装備だけが）を背中に、ハリの村を出る。

目指す先は、ミロンの村……近くにゴブリン前線基地という、少し難度が高めの狩り場がある。そこでこいつのレベルを上げる。

「ブン。ちょこまか動き回るな。アクティブモンスターを引っ掛けるぞ」

「ひゃあ、助けて@@!」

言う前にすでにプンは何匹かのウェアウルフと戯れていた。本当に世話の焼けるお姫様だ。

それら全てを杖で叩きのめし、静かにさせた。

「うわあ、エルくん強い!」

「いや……いくらオレがヒーラーとはいえ、レベル1のウェアウルフを倒すのは、高校生が幼稚園児に電気あんまをかけるような物だ」

小学生の時、二つ年下の弟にかけて泣かしてしまった事があったな、そういえば。

「電気あんま (?!?)」

プンが頭を疑問符でいっぱいにしている。

「なにそれ、楽しいの? プンにもやってみて、エルくん^^」

「ぐぐつてみる。その上でやってほしいというなら、オレの奥義を見せてやるっ」

「うわあーい^^」

プンは嬉しそうにはしゃぎながら街道をかけていった。……数引きのウェアウルフを引き連れて。まったく、世話が焼ける。

だが、それも少しの我慢だ。こいつがレベル40になれば……。そうなれば、用済みだ。

オレはブンと一つの取引をした。

このゲームでは、レベル40未満のキャラと40以上のキャラは師弟関係を結ぶことが出来る。師弟関係を結んだペアには様々な恩恵がある。

二人がログインしていると互いの取得経験値が増加する。40以上は1.2倍。40未満は2倍になる。

さらに、ペアの片割れがレベル40に達成して転職を終えると、40以上のキャラ（この場合はオレが該当する）には、高価な武器が送られる。

オレの目的はそれだ。でなければ……。ブンのような問題児を抱える気にはとてなれない。

ブンが40レベルにさえなればいいのだから、最初は適当に付き合っつて、あとは狩り友を作らせて勝手に40になってくれればいい。

オレはそれまでログインしなくてもいいし、別のゲームで遊ぶか別のキャラでプレイして、ブンが40になるのを待てばいい。

今だけの辛抱だ。ブンの奇行に振り回されるのも、ブンのお世話係をするのも、今だけの……。

「っつておい、ブン！ どこ行った!？」

気が付けば、プンの姿はどこにもなかった。ゲームから落ちたか？

「ここだよおおお……」

どこからともなく、プンの泣きそうな声（本日6度目）が聞こえてくる。

カメラをぐるぐる回してようやくプンを発見すると、ディスプレイの前でオレは大きな溜め息を付いた（本日23回目）。

「お魚泳いでるキレイな川眺めてたら、落ちちゃった。てへ（＾－＾＊）」

何がてへ（＾－＾＊）だ。ふざけんな。またリザレクションか。

プンのHPは川に落下した時1になり、呼吸できずにダメージを食らい水死体になって、ミロンの村の前の川を流れていた。

ディスプレイの前でオレは本日24回目の大きなため息を付く。

まだ時刻は午後10時になったばかり……一時間でオレは24回もため息を付いたのか。

さっさと40レベルになってオレから卒業してくれ、プン……。

初めての狩り友

ミロンの村は海に面していて、小さいが港もある。村の前を流れる川はそのまま海に繋がっていて、プンは川で蘇生された後、泳いで海に出ようとした。

『お魚いっぱい取ってくるね、獲りたてはきつとおいしいよ^q^じゅるり』などと言って、犬掻きで大海原へ漕ぎ出したプンは、またもHPゲージがやばいことになっていた。

リターンを使って、強制的にミロンへプンごと帰還させる。即座に周囲は石造りの簡素な家が立ち並び、閑散とした風景に早変わりした。

「エルくんのイジワル！ お魚はDHAがたくさん含まれてるんだよ！ お肉ばかり食べてたらダメなんだゾ！ ぶんぶん><」

「お前はアホか」

プンがぶんぶん言い出したので、一蹴してやる。そもそも、このゲームに狩猟とかの要素は無い。

海中を行けば、たまに水中型のMOBと出くわすこともあるが、狩ったところで手に入るのは経験値と少量の金だけだ。それにオレの食生活は野菜が中心だ。ピーマンは苦手だが……。

「プンはアホじゃないよ！ プンだもん><」

意味が解らん。

けれど……確かにオレも始めたころ、ミロンの村の前で川に飛び込んだことがあったな。その時、偶然近くにいたヤツも泳いで……一緒に泳いだことが縁で狩り友になって……色んな所に行ってバカをしたものだ。

世界が新鮮に見えた。目に映る全てが、キラキラ輝いていた。場違いなくらいレベルの高い狩り場へ迷い込んでしまっただけで、ザコモBに瞬殺されたり、エリアボスと知らずに殴ったら、他のパーティーメンバーまで巻き込んで全滅したり……。

ブンもそうなのか。今のブンには、この死に掛けのカオス・クロニクルが、とてもキラキラと眩しい世界なんだ。オレにとっては……ヒマな時間を潰す、ゴミ箱みたいな所なのに……。

ブンもやがて思い知るはずだ。この世界は、自分が思っているほどキレイなんかじゃないことに。

MMOと言っても、リアルと一緒になんだ。なりたい自分になんかなれない。結局、ここにいるのは現実の自分だ。

それは他のプレイヤーも同じ。『人間』なんだ。『人間』は……残酷だ。昨日まで友達だと思っていたら、今日は平気な顔して、裏切れるんだ。

だからオレは……誰も信じない。リアルもMMOも、信じられるのは自分だけ。他の奴らは、最後には敵だ。友達ごっここの果てにあるのは、残酷な結果だけ。

ブンにもそれを教えてやらなければならない。実際、ブンだって

ギルドに誘われておきながら、誰にも相手にされていないじゃないか。

「ブンなら、解るはずだ。」

「って、またか！ どこ行った、ブン！」

「ここおおおおお……」

なんと、すぐ真横からプンの悲痛な叫び声が聞こえるではないか。カメラを右に向けるが、そこには誰もいない。

「ブンは確かにそこに存在するのだが、石の壁以外何も無い。すると急に、石の壁から人の顔が生え出てきた。」

「うわあああああ!?!」

「壁にめり込んだじゃった、もうお嫁にいけない、つ……ぐすん」

移動不可状態になって、壁と同化していたらしい。再度リターンを詠唱し、プンを救出すると、村長からクエスト『ゴブリン討伐』を受けさせ、当初の目的地、ゴブリン前線基地へと向かう。

村から歩いて移動すると時間が少しかかるので、テレポーターを利用することにした。

テレポーターは、少々お金を使うが、一瞬で狩り場や他の村に移動できる便利な機能だ。村の広場に突っ立っている若いヒューマンの女性がテレポーターだ。

彼女の前に立つと、プンにゴブリン前線基地へのレポート代を手渡し、移動する。

一瞬で目の前の景色が移り変わり、不気味な背景が画面いっぱい広がっている。

BGMも、それまでのどかだった村のそれから、緊張感のある、今にも戦いが始まりそうなRPGっぽいのに変わる。

前線基地と言っても、切り崩された岩山に木で出来た簡素で居住性のなさそうな小屋が数軒と、丸太を縦に並べただけの柵が周りを覆っているだけ。

所詮ゴブリンの巣である。MOBのHPもそう高いほうではないので、楽に倒せる。

とはいえ、ここをナメてかかると痛い目に合う。このMOBはHPが20%以下になると、命乞いをしながら、小屋に逃げ出そうとする。

逃してしまつたら……その時は終わりだと思ったほうがいい。

数匹のエリートゴブリンを引き連れて戻ってくるのだ。数は2か3と大したことは無い、問題は奴らの能力が他のザコモBと一線を画しているという事だ。

その分、倒したときの経験値と獲得金額もバカに出来る量では無いし、高確率で装備アイテムをドロップする。

上級者の中には、あえてこれを狙う者もいる。だが、装備が貧弱

な上、フェイブのプンではまず詰むだろう。

そこで、オレの出番というワケだ。ターゲットを引き離すのは何も、ナイトのヘイトばかりじゃない。

ヒールライトを連発すれば、MOBの優先はヒーラーに向かう。ヒール系のスキルは敵対心を煽りやすく、無闇に連発すればヒーラーが襲われてしまうのだ。

そこを逆手に取る。あえてプンにヒールを連発してターゲットをオレに向けさせる。このレベル帯の攻撃なら、ローブ装備のオレでも十分に耐えられる。

その際にプンに各個撃破させ、一気に成長させる。ちんたらやっている暇は無い。明日は月曜日。学校もあるし、0時には寝ておきたい。

「行くぞプン。オレについて来い」

「あい！ @ @ 〃 なんだかエルくん、頼もしい〜。もしかして、エルくんて弟さんか妹さん、いるの？」

オレの後ろをぴよこぴよこ付いてくるプンが、無遠慮に質問を始める。

「いるよ、二つ下の泣き虫な弟が一人」

「やっぱりー！ エルくんて頼りになる優しいお兄さんって感じがしてたもん^^」

「違うよ、オレは」

と、そこまで喋りかけて後悔した。基本的にオレはリアルを語らない。ゲームはゲームだ。ここは出会い系サイトじゃない。

相手のリアルにも興味がない。オレは、ゲームをしているんだから。

「プンはね〜。一人っ子なんだあ。いいな〜兄弟><」

「そうか」

「エルくんエルくん！ エルくんはどんなお仕事してるの？ プンは高校生だよ^^」

高校生か。確かにそんな感じがするな。リアルのプンも、のほほんとしてて、天然なヤツかもしれない。

「エルくんって落ち着いてるよね〜@@ もしかして、30代の大人だったりする！？ キャー！ー渋い！」

「誰が30代だ！？ オレもお前と同じ高校生だよ。高校2年生だ、17歳だ。文句あるかコラ！ あるなら20文字以内で言ってみやがれ！」

しまった。つつい熱くなって個人情報の一部だが開示してしまった。にしても、なかなか失礼なヤツだな、プンは。

「えー！ー@@ 同い年なんだ〜エルくんってやっぱりすごいんだね。プン、尊敬しちゃいます><」

どこに敬意を表す部分があるのか解らないが……やっぱこいつ、
苦手だ。ペースを崩されるし、行動が読めない。

「……ここでもいいか」

ゴブリン前線基地はそれなりに面積が広い。入り口付近は比較的
MOBの数が少ないし、レベルも低めだが、奥のほうに行くと、前
述の小屋もあるしワンランク上のゴブリンも出てくる。

岩山の崖になっている所に、木でできたお粗末な小屋……その周
りには、6匹のゴブリン。当然、リンクする。適正レベルのプレイ
ヤーが突っ込めばたちまちピンチだが、オレはその適正レベルから
20以上高い。

ゴブリンの群れに突っ込んで奴らの注意を引き付ける。一斉に奴
らから袋叩きに合うが、ダメージは一ケタ台だ。

「よし、オレが引き付けている間にやれ、プン！」

「あい！ @ @」

プンの装備している剣が、背後からゴブリンを切り裂く。数回の
斬撃を繰り返すとゴブリンは力尽き、地面に倒れフェードアウトし、
消える。

やはり、ナイトであってもフェイブだ。攻撃力は他の種族のウオ
ーリア並みである。

瞬く間にプンは全てを平らげる。思ったよりもプンの火力は高い

らしい。これならレベル上げにそう時間はかからないかもしれない。
時間が経てば、すぐにゴブリンが出現するのだがそれだと時間が
惜しい。別の場所から数匹引いてくるか。

そう思っただけ移動しようとしたときだ。

スピーカーから、戦闘音が聞こえた。剣撃のSEや、ダメージを
食らったときのSEに、男の太い声。

「他にも狩をしているプレイヤーがいるのか」

「珍しいね@@」

ここからそう遠くない距離にいるようだ。そうだ。丁度いい。そ
のプレイヤーとプンを一緒に狩らせよう。二人が狩り友になっ
てくれれば、プンの育成をそいつに任せてしまえる。

「プン。一緒に狩りをする友達が欲しくないか？」

「欲しいー><」

「なら、ちょっと行ってみよう」

プンを引きつれ、音の発生源のエリアまで行くと、そこでは緑色
の肌の大男が巨大な剣を両手で振るい、ゴブリンを力任せに切り裂
いていた。

「オークだ。オークウォーリアだな、あれは」

6つの種族の一つ、オークは非常に高いHPと高い攻撃力を持っている。特に近接武器を得意とするウォーリアとの相性が高い。

反面、足が遅く命中率も低いが少数の人間には好まれている。おおくの人間は、そのビジュアルで好き嫌いが分かれるところだろう。

かつこよくもなければ、かわいいわけでもない。肌は緑色で、髪もスチールウールみたいに硬そうで、筋肉モリモリ。

はっきり言って、イロモノだ。だが、オーク間での友情は厚いらしく、オーク専用挨拶があるらしい。それくらい一部には人気がある。

「プンもオークにすればよかったのにな」

「えー嫌だよ、かわいくないもん><」

あのオークの大男がプンのようなセリフをしゃべって、死にまくるとする。

……うん。蘇生してもう一回殺すな。オレなら。

「フェイブでよかったな、プン」

「@@@?」

オークがその場にいたゴブリンを全滅させたのを確認して、オレは近寄った。

「すみません、もしよかったらこの子と一緒に狩りしませんか？」

オークは剣を構えたままの姿勢で硬直する。数秒間があつて、返事がきた。

「ぬを。ぼくちん如きでいいんですかい？ レベルも低いし、装備もシヨボーンですぞ（・・・）」

「こつちも似たようなものだし、オレが外部でヒールするんで気にしなくておk」

「ぬを。ほんじゃお言葉に甘えて！ ぼくちんキラ・ヤマモトです、オークウォーリアのレベル21です。別のサーバーから移住してきますた」

「へえ、何で？」

「PKギルドが我が物顔で狩り場占領するんですよ。ぼくちんのメインキャラだったラクス・クラタや、アスラン・ザマもよく彼らの毒牙にかかり……コロニーへの移住を決断したのです。地球の重力の井戸に引かれたままでは、ニュータイプに覚醒できないと思いますて」

……オタクかよ。

それにこのサーバー名、コロニーじゃねーし。

「なんだか解らないけど、すごい理由があつたんだね@！ p u n p u n 3 2 1 だよ〜プンって読んでね^^」

プンがヤマモトの前に出て、くるっと踊って見せた。

「ぬお。フェイブっ娘！ プンちゃんハアハア」

「ヤマちゃんおもしろーい^^ よろしくね！」

またひらりと舞ったブン。ヤマモトは無言であっちにいったりこちのうにいたり、プンの周りをうるちよろしていた。

「何やってんの、ヤマモト？」

「どのアングルが、一番ベストになって、白っていいよねえ。うぶぶ。中尉もそう思わんかね？」

「^^？」

ブンはヤマモトの変態行為に気付いていないらしい。あと、誰が中尉だ。

「この変態が！ やっぱりお前はいい！ あっちいけ、しっしー！」

「ぬお。変態とは失敬な！ 僕は」

ヤマモトのソーシャル『笑う』でオークの巨体が反り返り、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ド変態だー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3140z/>

カオス・クロニクル

2011年12月14日23時02分発行